

国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC : International Coalition of Library Consortia) 2011 年春季会合参加報告

直 江 千寿子, 渡 辺 真希子

抄録：国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC : International Coalition of Library Consortia) の会合は、年 2 回、春に北米、秋に欧州で開催されている。米国テキサス州オースティンで開催された第 23 回会合は、電子リソース価格調査、電子ジャーナルの価格モデル、PDA、電子ブック、ディスカバリー・サービス等をテーマとした全体討議やテーマ別分科会の他、バンダーグリの全 19 セッションから構成されていた。本稿ではその概要について報告する。

キーワード：図書館コンソーシアム、国際図書館コンソーシアム連合、ICOLC、電子ジャーナル、電子ブック、電子コンテンツ、資源共有、Google Books、ディスカバリー・サービス、オープンアクセス、PDA

1. はじめに

国公立大学図書館協力委員会による派遣事業の一環として、2011 年 3 月 21 日から 3 月 23 日にかけて米国テキサス州オースティンで開催された国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC : International Coalition of Library Consortia)¹⁾ の 2011 春季 (第 23 回北米) 会合²⁾ に参加した。

ICOLC の会合は、春に北米、秋に欧州と年 2 回開催されている。我が国からの北米会合への参加は、第 12 回及び第 14 回～第 21 回に続き、今回で 10 回目を数える³⁻¹⁷⁾。

以下、議題に沿ってその概要を報告する。

2. 開催状況

会議名：国際図書館コンソーシアム連合 2011 年春季 (第 23 回北米) 会合 (23rd North American Conference of the International Coalition of Library Consortia)

開催日程：2011 年 3 月 21 日～3 月 23 日

開催場所：AT&T Executive Education and Conference Center, オースティン (米国)

参加登録者：12 ヶ国 91 名 (内訳：米国 72 名、カナダ 7 名、トルコ、日本各 2 名、オーストラリア、オランダ、ギリシャ、チリ、ニュージーランド、ノルウェー、ポルトガル、南アフリカ各 1 名)

3. アジェンダ (議題一覧)

3 月 21 日 (月)

- ・セッション 1 : Battlefield Survey - Results, discussion
- ・セッション 2 : Business Models - historic

spend or something else - what is doable / practical? Really.

- ・セッション 3 : PDA Models - what are we doing as groups? Are they really better value?
- ・セッション 4 : National/Global Ideas for E-books
- ・バンダーグリル 1 : JSTOR
- ・バンダーグリル 2 : ARTstor
- ・セッション 5 : Gen Bus #1

3 月 22 日 (火)

- ・セッション 6 : Best Practices / Model License Brainstorming
- ・バンダーグリル 3 : ACS
- ・セッション 7 : Value and Assessment Measurement
- ・セッション 8・9 : Breakout Topics
- ・バンダーグリル 4 : Sage
- ・セッション 10 : Gen Bus #2

3 月 23 日 (水)

- ・バンダーグリル 5 : Disc Layer - Summon
- ・バンダーグリル 6 : Disc Layer - Ex Libris
- ・バンダーグリル 7 : Disc Layer - OCLC
- ・バンダーグリル 8 : Disc Layer - EBSCO
- ・セッション 11 : Discovery Layer Discussion

4. 議題概要

4.1 セッション 1 「2009-2010 年の価格調査報告と各国の事例」

価格調査の回答の概要は以下のとおりである。コ

ンソーシア数は、全世界で2010年の61から2011年は52に減少した。なぜならば、北米地区の統合が進んだからだ。価格変動の有無に関する回答によれば、ジャーナルとデータベースを合わせた全体では、2010年に比べ2011年に価格上昇となったタイトル数は609タイトルから595タイトルと減少している。しかし、ジャーナルについては、2010年の306タイトルから2011年の343タイトルに大幅増となっており、地区別では、アジア-パシフィックが26タイトルから32タイトル、欧州が103タイトルから148タイトル、北米が177タイトルから161タイトルとのことだった。北米以外の地区、中でも欧州における価格上昇が大きく、北米は減少の傾向を示している。この傾向はデータベースも同様である。

次に過去2年間のパッケージ型ジャーナルの縮小、及びキャンセル状況の調査報告もなされた。キャンセル状況の調査結果の有効性については、ベンダーとの交渉に有効活用すべきであるとの意見が出された。他にも、出版社との非公開の契約条件がある場合は難しいが、交渉によって得られた成果(値引き率や値引き額等)をコンソーシアム間で共有することや、出版社から提案を受けたが未契約で終わった件数を統計に取り、それを出版社との交渉のカードとして用いてはどうかとの提案もあった。T.サンビル氏が「Canceled or reduce any journal pub package in the last 2 years?」と質問したところ、数名の挙手があり、ビックディールの縮小が現実のものとなりつつあることを実感した。

また、コンソーシアム間のライセンスングについては、SCELC¹⁸⁾ Partnershipが紹介され、その特徴について説明がなされた。Partnershipによって、NN/LM pacific southwest (hospital lib)¹⁹⁾, Tex-Share (50 Texas private academics)²⁰⁾, ATLA²¹⁾, California State Univ. System等の新たなコンソーシアム間連携が創出された。電子ジャーナルの価格上昇抑制を目的に3年前より取り組みを行ってきているこのPartnershipでは、サーチチャージモデルを採用しており、図書館への情報ニーズの対応や、ベンダーとのパートナーシップのアレンジを行っている。コンソーシアム間の協力については、財政管理や誰が取りまとめるかが大きな課題だが、契約は各々のコンソーシアムで資金提供者やクライアントの意向に沿って行い、協力できる部分・分野でのみ連携するスタンスのため、金銭面でのトラブルは発生していないとのことだった。どのようにコンセプトやモデルを一般化し協力体制を築いていくか今後の課題は山積だが、すぐに実感で

きるような利益・利便性をコミュニティ全体で認識できるものを目指すべきであると会場では意見が一致していた。

4.2 セッション2「ビジネスモデル」

電子ジャーナルのビジネスモデルに関する討議では、ページ単位の利用率への対応、コンテンツ縮小による販売モデルの提案など、はじめに出版社の収益について意見が出された。コンテンツについては、評価基準を従来のFTEや引用度以外に、VPN経由の利用者数、科研費収入を基本にした価格算出について議論が及んだ。これについては、

- ・プエルトリコからの参加者から、インパクトファクター(IF)やWeb of Scienceによる指標は研究活動が小さい国では、大きな国と明らかに状況が異なる。一元的な評価は困難である。
- ・IFに代わる新しい指標は交渉の新しいツールとなり得るのではないか。
- ・American Chemical Society (ACS) のケースは、基準を持って判断する。
- ・Natureに対しては抜本的な対応が必要であるが、もっと問題が深刻なベンダーもある。

と言った意見が出て、参加者が賛同する様子が伺えた。

後半は、出版社にとっても利益があり、大学にとっても持続可能な中立的購読モデルの模索として、グリーンフィールドジャーナル(図書館は契約料の支払いがないなど、出版社とともに構築する新しい購読モデル)の導入検討について議論がなされた。

4.3 セッション3「PDAモデル」

このセッションではE-book PDAの主要電子図書ベンダーの導入状況と成果(アウトカム)についての報告があった。PDA (Patron-Driven Acquisition)は、トライアル等を経て実際に利用があったタイトルを購入できる近年注目を集めている利用者主導の契約モデルである。OCUL²²⁾プログラムでは、ebrary²³⁾を相手に、電子図書の共同購入及び共同利用について試験的な試みを行った。15万ドルをかけて16の参加館で電子図書467タイトルを購入し、ebraryから提供された目録も各館にアップロードしている。その結果としては、15万ドルの支出で150万ドルの価値が得られたという。また、36の研究図書館が参加するOrbis Cascade Alliance²⁴⁾は、2010年に電子図書チームを結成し、YBP²⁵⁾とパートナーを組み、短期間リースモデル

等を打ち出してきている EBL²⁶⁾ を相手に、23 万 1 千ドルの資金をもとに同様なパイロットプログラムを実施すると報告がなされた。

4.4 セッション4「電子ブック」

フロリダ州立大学システム²⁷⁾、NELCO コンソーシアム²⁸⁾、コロラド研究図書館協定²⁹⁾の事例報告。NELCO は、イギリス、アメリカ、カナダ、韓国の 111 の法科図書館の連合であり、KLUWER コレクション (59 タイトル) 共同購入などを 2009 年より毎年実施している。コロラド研究図書館協定は、PDA 計画、シュプリング電子ブック計画、2005 年バックファイル 3 万冊購入などを実施している。

4.5 ベンダーグリル 1・2「JSTOR & ARTstor」

JSTOR³⁰⁾からは、ITHAKA³¹⁾、JSTOR、PORTICO³²⁾との連携状況について説明があり、新たにカリフォルニア (州立) 大学、シカゴ大学出版のアーカイブも開始された。その結果、174 タイトル、19 出版社となり、2012 年には 13 タイトルが追加予定であることが報告された。次いで、ARTstor³³⁾ (画像コンテンツの会社) からは、製品の概要について説明があった。主に Google のイメージ検索画像などのメタデータを処理し、製品として提供していることが紹介された。

4.6 セッション5「Gen Bus (運営会議) #1」

本セッションは、T. サンビル氏 (Lyris³⁴⁾)、A. アンダーソン氏 (ARL³⁵⁾) から ARL のホストブログ、JISC NESLi2 license³⁶⁾ について話題提供があり、今後の ICOLC の役割について議論され、基本方針としては現在担っているものを継続する方向で会場の意見が一致した。去年のシカゴ大会での電子出版の動きを受け (MUSE)、今年度はこれに大学図書館出版協会が参加し、UPCC を結成した³⁷⁾。また、SCELC についても言及があり、SCOAP3³⁸⁾ の日本加盟について報告がなされた。

4.7 セッション6「ベストプラクティス」

3 グループに分かれての非公式セッションが行われた。筆者らが参加したグループでは、電子ツールに関する議論が行われ、相互運用、利便性の両面から議論がなされた。その後は、電子ブックの適正価格について議論が行われ、電子ジャーナルの時のように価格が操作されることのないよう、コントロールする必要があるとの意見が出た。中国やインドの科学分野資料費の高騰についても意見が出された。

4.8 ベンダーグリル 3「ACS」

ACS より、現状と今後のビジネスモデルの方向性についての報告と説明があった。製品については、冊子体購読からデータベースアクセスタイプへ更に移行すること、価格算出については、カーネギー分類や FTE、利用統計に加え、研究費取得状況などを新しい契約モデルの指標として検討していることが説明された。会場からは、GDP 等も考慮した価格設定にすべきではという意見があった。

4.9 セッション7「評価方法」

前半で、NELCO から NPS (推奨者正味比率) と「財務」「顧客」「業務プロセス」「学習と成長」の 4 つの視点から戦略的な経営評価を行うバランスト・スコアカードについて、CIC³⁹⁾からは ROI (投資利益率) を用いた評価方法やコンテンツ評価に関してそれぞれ事例報告や話題提供があった。利用者調査、財政、選択メトリック、ICOLC の役割についてディスカッションし、大学の財政状況、国レベルのプラットフォームについて議論があった。

4.10 セッション8・9「Breakout Topics (分科会)」

1 度目のセッションは、① Strategic planning、② All things Google、③ The next big things for your group、④ Campus Analytical Tools の 4 つのテーマで行われた。筆者らが参加した② All things Google では、Google eBook の図書館利用許諾に関する最新事例について議論がなされた。具体的には、インディアナ大学やペンシルヴァニア大学、パデュー大学では、Google のフリードキュメントシステムを利用してコレクションを増やしていることを踏まえ、このようなコレクションが一つの大きな市場となってきたと指摘があった。大規模図書館からは所蔵コレクションの価値が低下すると危惧する声があったが、小規模図書館からは配架スペースを考えずにコレクションを増やせ、インフラ整備にも繋がると好意的な意見が出ていた。現時点では、図書館が Google をどのようなパートナーとして位置づけるか見通しは立っていない。そうした中で、会合中の 3 月 22 日に、Google ブックス訴訟における修正和解案が否決されたことを受け、図書館界の March madness (狂乱の 3 月) だという声もあったが、今後も Google の動向を見極めていくことが大事であると参加者の意見が一致した。

2 度目のセッションでは Strategic planning に参加した。テーマは、厳しい財政状況における図書館の現状と図書館運営の戦略的計画についてであった。会場からは、図書館は、学生や教員を資料とつ

なげるために運営されている、意思決定は教員との連携によるものである、などの意見が出された。また、欧州のコンソーシアムからは、コンソーシアムの業務としてアグリーメントの管理の他、モビリティ (VPN)、アクセスインフラの整備を実践しており、ナショナル・プログラムの開発や IT 技術の利用教育を実施していると報告がなされた。また、実践的な参考書⁴⁰⁾の紹介があった。特筆する事例報告等はなかったが、様々な立場のメンバー間で問題をシェアし、共通意識を持って情報を伝え合うことの大切さが確認された。

4.11 ベンダーグリル 4 [Sage]

本セッションでは会社概要、2011 年における SAGE Premier のパッケージ内容、新しいサブジェクト・コレクションについて説明があった。会場からは、2007-2010 年にかけて購読額が 276% 増となっている状況について説明を求める声が出た。Sage からは、購読額が 276% 増の図書館はごく一部であり、ビジネスであるためコンテンツやサービスに応じて購読額が増加していくこと、コレクションを社会に還元できるようサブジェクト毎のパッケージを用意しているという回答しか得られなかった。

4.12 セッション 10 [Gen Bus (運営会議) #2]

次回の ICOLC 開催地であるイスタンブールについて紹介がなされた後、セッション 6 [Best Practices / Model License Brainstorming] 及びセッション 8・9 [Breakout Topics] でどのような議論がなされたかについて簡単な全体報告があった。セッション 6 については、ICOLC の今後の課題について、ロードマップを作成していることと、イスタンブールの会合までに議論を続けていくことで意見が一致したと話があった。セッション 8・9 については、前述の 4.10 の内容に加え、Google の課金方法や、アグリゲータとの連携の可能性が話題に上ったとあった。その他のテーマについては、ディスカバリー・サービスや地域アーカイブの重要性、HathiTrust⁴¹⁾ の様な新しいシェアリング、画像や音声データ等テキスト以外のデータの取り扱い方法、SUSHI⁴²⁾ やクラウドシステム、PDA 等の新しいテクノロジーの利用、電子ブックのフェアユース、教員の世代間ギャップへの対応、予算獲得、(Big Deal に対する) Smaller Deal、アフリカをはじめとした第三世界との協力の必要性等が話題に上ったと報告があった。

4.13 ベンダーグリル 5~8 [Summon, Ex Libris, OCLC, EBSCO]

ディスカバリー・サービスを展開する 4 社より、各社入れ替え制でサービス概要のプレゼンテーションがあり、それに基づいて質疑応答が行われた。

① Summon

ビジネスモデルやドキュメントの定義方法についての確認があった他、Summon⁴³⁾ の将来的な戦略や EBSCO の新サービスへの対応について会場から質問があった。それに対して、Serials Solution 社からは、将来的には Summon によるコンソーシアム参加館内での資料・情報共有を目指していること、EBSCO への対応については、ProQuest が現在 Summon のパートナーであるため、EBSCO と契約を結ぶことをせず、出版社との直接契約を積極的に進めていると回答があった。

② Ex Libris

Primo Central⁴⁴⁾ のメタデータ数や供給元数、Summon に対する見解について質問があった。メタデータ数については随時拡大中のため回答できないこと、供給元についても詳細な数は伝えられないが、EBSCO とは良好な関係であると回答があった。また、Summon は市場的に成功していると担当者が個人的に述べていたが、Ex Libris 社としては EBSCO が最も有力なパートナーと考えていると述べていた。

③ OCLC

WorldCat Local⁴⁵⁾ が北米限定のサービスかどうかということと、競合他社への対応策について会場から質問があった。それに対して、OCLC からは、WorldCat Local の外国向けのモデルも検討中であること、競合他社へ対抗すべく、随時新しい出版社や提供元との契約を増やす努力を行っていること、また、契約先等全ての情報を HP で公開していると説明があった。

④ EBSCO

EBSCO Discovery Service (EDS)⁴⁶⁾ は、他社のディスカバリー・サービスと異なる点として、価格体系がカタログ数のみで決まること、Primo Central 等のように CrossRef⁴⁷⁾ レコードを採用せず独自に詳細なメタデータを作成していることを挙げていた。会場からは、昨年 12 月に発表された Ex Libris との合意書の内容について質問があり、それについては、約 320 の EBSCO のデータベースが Primo Central の一部となる予定だが、現在交渉中のた

め、決まり次第発表すると回答があった。また、EBSCOとしては、Googleをライバルとしてとらえており、ディスカバリー・サービスを通じて、大学と協力していきたいと述べていた。

4.14 セッション11「ディスカバリー・サービスについてのディスカッション」

4社に対する Grill をもとに、ディスカバリー・サービスについてディスカッションが行われた。中でも、今求められているのはコンテンツの量ではなく、ユーザーが求める情報に関連したものが容易に見られるデータベースであるという意見が多く賛同を得ていた。また、メタデータの公開を検討すべきであるという意見や、オープンアクセスのコンテンツがリンクリゾルバーと上手くリンクできずにいることについて、コンソーシアムでできるサービスを考える必要があるという意見も出ていた。

5. おわりに

今回の会合でも、価格高騰が続く電子リソース市場に対して、引き続き出版社との粘り強い交渉やオープンアクセスの推進を行いつつ、新しいビジネスモデルを出版社と共に模索している各国の様子がうかがえた。

また、電子リソースの新しいシェアリングや成長著しい電子ブック、ディスカバリー・サービス等を題材に、膨大な電子リソースをいかに評価・収集・保存し、利用者が求めるものをアクセスしやすい形で提供するかについて、様々な角度から積極的に話し合われた会合でもあった。それらの中でも、コンテンツの評価方法や、複数のコンソーシアムの連携による取組みに対する参加者の関心が特に高かった。今後も電子リソースの増加が見込まれ、図書館資料に占める割合が高まっている中、日本でも図書館の評価機能の強化が求められることとなるだろう。

昨年各国でコンソーシアムの合併や連携が進められてきているが、この4月、日本のコンソーシアムでも大きな動きがあった。国立大学図書館協会コンソーシアム(JANULコンソーシアム)と公立大学図書館コンソーシアム(PULC)とのアライアンスにより、新しく大学図書館コンソーシアム連合(JUSTICE)が発足した。JUSTICEの主な目的は、スケールメリットを活かした価格交渉をベースにバックファイルを含む電子ジャーナル等の安定的・継続的な確保及び提供である。ICOLCや各国の動向を注視するとともに、JUSTICEのスケールメリットと両コンソーシアムの長所を生かした今後

の活動に期待したい。

謝辞

最後になりましたが、参加の機会を与えてくださった国公私立大学図書館協力委員会、国立大学図書館協会、公立大学協会図書館協議会、私立大学図書館協会をはじめとする関係者の皆様に感謝いたします。

注・参考文献

- 1) International Coalition of Library Consortia (ICOLC). (online), <http://www.library.yale.edu/consortia/>, (accessed 2011-08-28).
- 2) ICOLC SPRING 2011 - Austin, TX. (online), <http://www.amigos.org/icolc/index.html>, (accessed 2011-08-28).
- 3) 尾城孝一. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 第12回会合報告. 大学図書館研究. 2003, no. 67, p. 28-36.
- 4) 尾城孝一, 松本和子, 井上修. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 第14回会合報告. 大学図書館研究. 2004, no. 71, p. 49-55.
- 5) 山本和雄. 欧州国際図書館コンソーシアム連合 (E-ICOLC: International Coalition of Library Consortia in Europe) 第5回会合参加報告. 大学図書館研究. 2004, no. 71, p. 56-62.
- 6) 前田弘子, 青木堅司, 井上修. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 第15回会合参加報告. 大学図書館研究. 2004, no. 72, p. 58-68.
- 7) 山本和雄, 市古みどり. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 第6回欧州会合参加報告. 大学図書館研究. 2005, no. 74, p. 74-80.
- 8) 藤田儒聖, 庄ゆかり, 井上修. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) ボストン大会参加報告. 大学図書館研究. 2005, no. 75, p. 81-93.
- 9) 荘司雅之, 山本和雄, 藤田儒聖. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 2005年秋季会合参加報告. 大学図書館研究. 2006, no. 76, p. 82-96.
- 10) 平吹佳世子, 井上修. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 2006年春季会合参加報告. 大学図書館研究. 2006, no. 78, p. 124-133.
- 11) 長内尚子, 荘司雅之, 加藤晃一. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 2007年春季会合参加報告. 大学

- 図書館研究. 2008, no. 84, p. 56-64.
- 12) 平吹佳世子, 菅野朋子. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 2007 年秋季会合参加報告. 大学図書館研究. 2008, no. 84, p. 65-70.
 - 13) 赤崎久美, 吉田幸苗. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 2008 年春季会合参加報告. 大学図書館研究. 2009, no. 85, p. 85-90.
 - 14) 白方知恵子, 荘司雅之. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 第 10 回欧州秋季会合 2008 参加報告. 大学図書館研究. 2009, no. 86, p. 105-114.
 - 15) 酒見佳世, 井上修. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 2009 年春季会合参加報告. 大学図書館研究. 2009, no. 87, p. 18-25.
 - 16) 中村健, 守屋文葉. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 2009 年秋季会合参加報告. 大学図書館研究. 2010, no. 89, p. 69-78.
 - 17) 渡辺由紀子, 渡辺真希子, 今村昭一. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 2010 年春季会合参加報告. 2010, no. 90, p. 61-71.
 - 18) SCEL (Statewide California Electronic Library Consortium). (online), <http://scelc.org/>, (accessed 2011-08-28).
 - 19) NN/LM (National Network of Libraries of Medicine). (online), <http://nnlm.gov/>, (accessed 2011-08-28).
 - 20) TexShare. (online), <https://www.tsl.state.tx.us/texshare/index.html>, (accessed 2011-08-28).
 - 21) ATLA (The American Theological Library Association). (online), <http://www.atla.com/Pages/default.aspx>, (accessed 2011-08-28).
 - 22) OCU (Ontario Council of University Libraries). (online), <http://www.ocul.on.ca/>, (accessed 2011-08-28).
 - 23) ebrary. (online), <http://www.ebrary.com/corp/>, (accessed 2011-08-28).
 - 24) Orbis Cascade Alliance. (online), <http://www.orbiscascade.org/>, (accessed 2011-08-28).
 - 25) YBP. (online), <http://www.ybp.com/>, (accessed 2011-08-28).
 - 26) EBL (Ebook Library). (online), <http://www.ebib.com/>, (accessed 2011-08-28).
 - 27) State University System of Florida. (online), <http://www.flbog.org/>, (accessed 2011-08-28).
 - 28) NELLCO. (online), <http://nellco.org/>, (accessed 2011-08-28).
 - 29) Colorado Alliance of Research Libraries. (online), <http://www.coalliance.org/>, (accessed 2011-08-28).
 - 30) JSTOR. (online), <http://www.jstor.org/>, (accessed 2011-08-28).
 - 31) ITHAKA. (online), <http://www.ithaka.org/>, (accessed 2011-08-28).
 - 32) PORTICO. (online) <http://www.portico.org/digital-preservation/>, (accessed 2011-08-28).
 - 33) ARTstor. (online), <http://www.artstor.org/index.shtml>, (accessed 2011-08-28).
 - 34) Lyris. (online), <http://www.lyris.org/>, (accessed 2011-08-28).
 - 35) ARL (Association of Research Libraries). (online), <http://www.arl.org/>, (accessed 2011-08-28).
 - 36) JISC NESLi2 license. (online), <http://www.jisc-collections.ac.uk/Help-and-information/How-Model-Licences-work/NESLi2-Model-Licence-/>, (accessed 2011-08-28).
 - 37) Project MUSE. "UPCC BOOKS on MUSEP". (online), <http://muse.jhu.edu/>, (accessed 2011-08-28).
 - 38) SCOAP3. (online), <http://scoap3.org/>, (accessed 2011-08-28).
 - 39) CIC (Committee on Institutional Cooperation). (online), <http://www.cic.net/Home.aspx>, (accessed 2011-08-28).
 - 40) Michael J. A.; Jude K. Strategic Planning for Non-profit Organization: a practical guide and workbook. 2nd ed., John Wiley and Sons, 2005, 480p.
 - 41) HathiTrust. (online), <http://www.hathitrust.org/>, (accessed 2011-08-28).
 - 42) SUSHI (Standardized Usage Statistics Harvesting Initiative). (online), <http://www.niso.org/workrooms/sushi>, (accessed 2011-08-28).
 - 43) Summon. (online), <http://www.serialssolutions.com/discovery/summon/>, (accessed 2011-08-28).
 - 44) Primo Central index. (online), <http://www.exlibrisgroup.com/category/PrimoOverview>, (accessed 2011-08-28).
 - 45) WorldCat Local. (online), <http://www.oclc.org/worldcatlocal/default.htm>, (accessed 2011-08-28).
 - 46) EBSCO Discovery Service. (online), <http://www.ebscohost.com/discovery/eds-about>, (accessed 2011-08-28).
 - 47) CrossRef. (online), <http://www.crossref.org/>, (accessed 2011-08-28).

< 2011.9.5 受理 なおえ ちずこ 横浜国立大学教育人間科学部学務第一係, わたなべ まきこ 横浜市立大学学術情報課医学情報センター >

Chizuko NAOE, Makiko WATANABE
Report of the ICOLC, 2011 Spring Meeting

Abstract : The International Coalition of Library Consortia meets twice a year, in North America in the spring and in Europe in the fall. The 23rd meeting was held in Austin Texas and included a total of nineteen sessions on topics such as value and assessment measures for e-resources, pricing models for e-journals, PDA, e-books and discovery services and breakout sessions on different topics. This paper provides an overview of these sessions.

Keywords : library consortia / International Coalition of Library Consortia / ICOLC / e-journals / e-books / e-contents / shared resources / Google Books / discovery service / open access / PDA